プーシキン文学における「空」

佐々木照央

プーシキン文学の登場人物は様々な「執着」をみせる。小さき者は（『ベールキン物語』の駅長ヴィリン、そして『青銅の騎士』のエヴゲーニイが代表的主人公である）自分の愛する対象、死んだ恋人や家出娘にどこまでも執着するがゆえに、一方は狂い死に、他方は酒に溺れ死ぬ。失った愛への執着さえなければ、忘却さえできれば、この小さき人々は普通の平凡な生活を送ったであろう。しかし、彼らは親しい人々（他者）への愛着を捨てきれず、恋人や娘の帰還を祈り、扉を叩き探し求めた。小さき者の無常観は次の悲痛な叫びにあらわれている。

未亡人と娘、彼のパラーシャ、
彼の夢…　あるいは夢で
これを見ているのか？　あるいはわれらが
生の一切が無であるのか、空（くう）なる夢のごとく、
地上への天の翻弄か？

『青銅の騎士』第一部

この「一切無（ニシト）」という無常観はこの場合、愛する他者を失ったことから発している。小さき者はこの天の嘲弄から逃れるすべがなく、ただ発狂によって現実の災厄から精神を離脱させるのみである。これは深く愛するがゆえの悲劇である。

しかしプーシキンは小さき者に死後の慰めを与えた。ヴィリンには娘の墓参りを、『青銅の騎士』のエヴゲー

ニイには復活の予感を。『青銅の騎士』の序文で漁師が登場し、最後にまた漁師が登場して、小島で夕食をとっている。サンクト・ペテルブルグの名前の由来である、聖ペトロ（シモン）は漁師であった。『青銅の騎士』はエヴゲーニイの運命の背景にペトロの変容を隠し絵としている。漁師達の食事の場面は復活の期待をいだかせる。

小さな島が
入り江に見える。ときどき
そこに漁網をもって
おそくまで漁をした漁師が停泊し
貧しい晩飯を料理している。

『青銅の騎士』最終部

小さき者にはそのような死後の救いが予感されるが、余計者は永遠の彷徨を運命づけられる。場所を変えることができる余計者の場合この無常観は他の土地に身を移しての自分の「自由」の追求、自分自身の「解脱」志向へむすびつく。余計者は自己を捨ててまで他の人を愛するという深い愛はない。彼は自分を常に犠牲者とみる。

卑俗な空しき浮き世、
二枚舌の不快、誹謗中傷の
犠牲にうんざりして
世捨て人、自然の友たる
彼は故郷の国境を捨てて
遠くの土地に飛んだ
自由のほがらかなまぼろしをいだいて。
自由よ、汝のみを
空漠の世界に探してきた。

『カフカースの虜』

大切な人を失った小さき者の無常観と、自分を世の犠牲者とみなして、自ら世捨て人、亡命者となって自分の自由を追求する余計者、これは対照的なプーシキン文学の主人公像である。余計者は憂き世にたいして無関心と無感動を装い、「厭離穢土」の感情から異国への旅を希求し自分自身の離脱を志向する。世間への絶望を隠さない。しかしながら、プーシキン文学の余計者群像は「空」の思想、「無」の思想、「無常観」を口にしつつも、

最後まで一貫してその思想に忠実であるわけではない。結局、余計者もまた自己愛による「執着」と「煩悩」にとりつかれて、嫉妬に狂い、殺人を犯す。自分の「空」の思想、自分の「無常観」さえ保持しつづけることができない。プーシキンは余計者の主人公を自由と解脱の世界にとどまらせない。

『エヴゲーニイ・オネーギン』の題辞に不思議なフランス語がある。金子幸彦訳では次のようになっている。

「虚栄心にみちたる彼はなお特別なる傲慢さをもっていた。それは彼をしてよきおこないにつけ、悪しきおこないにつけ、同じような無関心さをもってすべてを告白せしめる。これは架空の優越観の結果なのかもしれない」（『プーシキン・レールモントフ』世界文学大系第二六巻、筑摩書房、一九六七、六七頁）

この「虚栄心」と訳される仏語の「ヴァニテ」はむしろ旧約聖書の「伝道の書」で使用された意味に近いと思われる。日本語訳の「空の空なり」にあたる部分である。要約すれば「空の思想にひかれた彼」が「傲慢」にも、「善」も「悪」も同じく「空」という態度をとる。これも「つまらぬ優越感のなせるわざ」である。おおよその意味はこのように解釈できる。ヴァニテを「空」に置き換えたならば、プーシキン文学における「無常」のもつ地位、そして「無常観」をもって憂き世を見る「傲慢な者」とその「優越観のはかなさ」というプーシキンの評価が浮かび出てくる。

プーシキンは少年期からすでにこの世を「無常」と見る詩を数多く書いている。

ぼくはまもなくともだちと別れ、
わたしのかなしき生命の痕跡に
だれももう気づきはすまい
わたしの最後の視線は
不死の光を見ることはない
若き日々の薄れゆく灯明は
無の静かな闇を照らす。

『エレジー』（リセー時代の詩一八一六年頃）

死の予感、「無」（ニシトジェストヴォ）が少年時代の詩の中で歌われる。

不幸、煩悩、無力のおとし子の
ぼくたちはみな生まれながらにおそろしい墓へと向
かう定め
はかない縁は常時壊れる
ぼくらの世紀は定かならぬ日、時々刻々の変動。

『不信』（一八一七年）

しかし、若くして「無常」を認識した彼も、南部への追放の憂き身を味わって以後「空」にとらわれた「傲慢なる者」を否定する傾向を強める。それもまた「つまらぬ優越観」によるものである、と。徹底した「無」の思想に耽溺することを、プーシキンは非人間的であるとみなした。

タヴリーダ

わが青春をかえしたまえ
汝、心にとどかぬ闇、
盲目の絶望の住むところ、
無（ニシトージェストヴォ）よ！　空なる幻影よ、
汝の保護を我は求めず、
人生の甘い空想を好まず
幸福の日々を知らないとしても
それでも我は汝を信じない、
汝は人間の思想とは無縁である！
汝を畏怖するのは驕れる知性！

（一八二二年）

プーシキンは少年時代から詩にあれほど書いてきた「無」を、追放の身となった今、「無」を人間の思想と無縁である、という。またこの詩では「わたしの魂は不死」と記す。この詩の中では死者と生者は「記憶」、「思い出」によって地上で結び合わされる。

我の中で親しき者の記憶は不死、
わが魂はそれなくして何であろう？
詩人たちよ、きみたちはなぜ信じられないか？
そう、影は密かな群れをなして
悲しき忘却の河レーテの岸から
地上の岸へと飛来して集まる。
その影はおとずれる
生がいとしかったその場所を

『タヴリーダ』（一八二二年）

絶対的な「無」を非人間的思想としてしりぞけながらも、プーシキンの死生観はわが国の仏教のそれを思わせる。追放、監視という不幸な「獄」を体験し、そこで生きざるをえない自分を発見したとき、詩人の「無」や「空」への理解が深化し、さほどの苦難にあわない身でただ「一切皆空」といいきることの「傲慢さ」を認識した、といえよう。

追放中のプーシキン文学においては、「無常」のさまざまなあらわれがいろいろな題材で描かれる。『バフチサライの泉』は平泉で芭蕉が歌った「夏草や兵どもがゆめのあと」を想起させる権力者の無常である。

わたしはバフチサライの
忘却に眠る宮殿を訪れた。
無言の廊下を
わたしは歩き、諸民族をいためつけた
荒々しきタタールが宴をひらき、
恐ろしき襲撃の後
派手な逸楽にふけったその場所を
歩いた。〈…〉
汗どもはどこにかくれたか？
ハーレムはいずこ？
まわりは静寂、すべてがものうげで、
すべて変わってしまった。

『バフチサライの泉』

『ジプシー』では男女の愛の無常が描かれる。妻の浮気に疑心暗鬼となっているアレーコにたいして老ジプシーは男女間の愛のはかなさ、うつりかわりの不可避を説く。それは旧約の「伝道の書」に似通ったものであった。

老人
どうして？　若さは鳥よりも自由だ。
だれが愛を力ずくでつなぎとめられようか？
喜びは順繰りにさずけられる。
あったことは、もうふたたびない。

アレーコは自分の嫉妬に苦しむ。そして妻とその恋人

を殺害する。自由を求め、都会の喧噪を捨て、解脱したはずの余計者が、自然の懐にいだかれてなおかつ嫉妬の奴隷となっていく。世間から離脱し、超然と生きていると見えた者が、ふたたび煩悩の世界にひきずりもどされる。これはプーシキン文学の特徴である。

『モーツァルトとサリエーリ』の主人公サリエーリは音楽の修行者である。その修行のためとあらばいっさいの快楽を拒否し、音楽にのみうちこむ。

わたしは早くからひまつぶしの娯楽を拒否し、
音楽に無縁の学問はわたしにはいろあせてみえ、
かたくなに傲然とわたしはそれらを離れ、
ただひたすら音楽にのみ専心した。

しかし、解脱したはずのサリエーリの心に嫉妬と羨望が巣くい始める。

いま、あえて自らいおう、わたしは今
羨望者だ。わたしは嫉妬する。深く
苦しいほど嫉妬する。おお天よ！
どこに真実があるというのだ、
神聖なる天賦の才能が、不死の天才が、
燃える愛と自己犠牲と
労苦と努力と祈りへの
報いとしてさずけられるのではなく、
うつけものの頭上にかがやくとは、
遊び人の頭上にとは、おおモーツァルトよ！

『モーツァルトとサリエーリ』

世の娯楽を拒否し音楽に献身し努力してきたサリエーリは「天」が不公平であり無常であると慨嘆しモーツァルトを天にかわって殺害する。プーシキンは、解脱を志向した修行者がふたたび煩悩にとらわれた時に冷酷となるさまを活写する。サリエーリの論理は「ポーリザ」（効用）を基に組み立てられる。

モーツァルトが生きて、さらに新たな高みに到達したとして、
何の益（ポーリザ）があるか？
彼がそれにより芸術を向上させるか？　否である。

芸術は彼が消えたら再び低下してしまう。
彼はわれわれのために後継者を残さない。
彼に何の益があろうか？

『モーツァルトとサリエーリ』

サリエーリは世のため人のため、音楽のためという「ポーリザ」（効用）を口実にする。しかしモーツァルトはそれにたいして次のように言って死んでいく。

われわれ選ばれた者、
卑小なポーリザ（効用）を軽侮する遊楽の幸福者、
われわれ、美のみに仕える者、は数少ない。

『モーツァルトとサリエーリ』

モーツァルトを通してプーシキンは苦行者ではなく遊ぶ者こそが、すなわち仕事の中で遊楽する者が、世のためとか人のためといった効用をふくめたあらゆる雑念からまぬがれていることを描き出している。「無我」とは自分の利益（我利）や他人の利益（利他）から離れた境地であるとすれば、モーツァルトの言葉をかりてプーシキンが「効用」（ポーリザ）にとらわれない、と表現した境地はこの「無我」に近いと思われる。

サリエーリには「空」への「とらわれ」がある。つまり、自分は全てを断ち切って「音楽」の修行をしている、と思いこむ。「全ての快楽を断ち切った」と言うとき、一切の執着の否定、執着するものの否定、さらに遊楽するとみえる者への憎悪、が生まれる。そして万物、万人の絶対否定を志向する。このような修行者が一切「空」なりというとき、普通の人間の煩悩のみならず、その存在そのものも「空」とされ、さらには天才すらも「空」とされる。おうおうにしてロシアで元神学生が冷酷な独裁者となる理由もここにある。

サリエーリの音楽修行は自分自身の「孤我」への執着である。小さき人々（エヴゲーニイ、ヴィリン）はそれに対し「他」への愛着がある。モーツァルトの音楽への態度はその両方の愛着から自由である。プーシキンの描くモーツァルトは「効用」とは無関係に作曲する。まさに創造の世界において世間的要求の一切から解脱し、ハーモニイの中に遊ぶ。ただし、皆がそうなれば、世は滅びる、とプーシキンのモーツァルトはいう。

いつになればみんながハーモニイの力を
感じとるようになるだろう！　いや、その時には
世界も存在しえなくなるだろう、だれも低次元の
生活の苦労などであくせくしなくなるだろうから、
みんな自由な芸術に耽ってしまうだろうから

『モーツァルトとサリエーリ』

モーツァルトは芸術を堪能する者だけでは世界が成り立たないと理解する。煩悩の中で生きる人間、小さき人々の一喜一憂、つまり「執着」こそが人間社会と人間界の基本である。プーシキン自身、社会の喧噪の中で、誹謗中傷と借金苦の中で、政治的迫害の中で、あるいは恋愛や人間関係における自分の不誠実を後悔しながら、外的・内的に地獄を住処として詩作の中で遊び楽しんでいたにちがいない。プーシキンは詩人をうつろう世のかげろうさながらの最も弱い者、「世の小さな子供のなかの誰よりも微小（フセッフ・ニシトジュネイ）なる者」と記す。詩人は自分自身を「無」（ニシト）とみなす。そして神の声をいれる器とみる。

詩人はアポロンの神により
聖なるいけにえの
炎のもとに呼ばれぬかぎり
うつろなうき世のわずらいに
心おじつつ身をひたす。
そのきよき竪琴は鳴らず
心はつめたい眠りにふける。
かれはこの世のとりえなき
子供のなかのだれよりも
とりえなき者であるかも知れぬ。
　けれどひとたび神のことばが
詩人のさとい耳にふれるときに
さながら　めざめた鷲のように
詩人の魂はふるえおののく。
かれは世の楽しみをいといつつ
ひとのとりざたも心にとめず
時の王者の足もとに誇りたかき
その頭をたれることもない。
おののきとひびきに満たされ

たけく　きびしい心をいだいて
人なき海の岸のほとりへ
ざわめく森へのがれてゆく…
（金子幸彦訳『詩人』一八二七年）

プーシキンにあっては現実から空間的に逃れて他の土地に行くというのではなく、現実生活の桎梏の中で、自分の文学創造にのみ快楽を味わう、すなわち、身は現実の獄舎につながれていながら、心は歌を奏でるという、心の離脱、解放であった。籠の中で歌うまひわになぞらえて、詩人はうたう。

かなしきは籠のまひわよ！
野辺の茂みも　自由の日々もうち忘れて
おまえは餌をついばみ　水をはねかし
わずらいもなく　おのが歌の調べを楽しむ。
（金子幸彦訳）

どんないたいけな子供よりも微小な「詩人」というプーシキンの気持ちは一八二五年以降のミハイロフスコエ村の幽閉生活および隠遁生活において赤裸々につづられている。村ではソロチ河の幻想的な風景、曾祖父から詩人の次男までが植えた菩提樹の並木、古城跡、のどかな農家と田園、小鳥のさえずる森、など「瞑想」に絶好の場が限りなくある。現在では沼の小島には「隠遁の島」、槲の巨木には「隠遁の槲」などと命名され、この土地が都会の喧噪から逃れた詩人の隠遁生活の場であったことがしのばれる。

プーシキンは外的な諸条件のみならず、常に自分自身の罪の意識、自分の過去の悔恨に心をかきむしられ、他人を責めることなく自己を苛む。この自省癖が詩人の良心でもある。恋愛関係においては自分が捨てた恋人の死に涙すら出ない自分を描いている。

ふるさとの青い空のもとに
あのひとは病みやつれ
日とともにしぼみゆき…
そしてついにしぼみはてた。
きっとわたしの頭の上を
あのうら若いたましいが

飛びめぐったことだろう。
……
つめたく消えた愛はいずこか？
いまのわたしのこころには
ひとのことばを信じやすい
あのいとしいたましいに
帰らぬ日々のあまい思いに
ささげるなみだも
とがめのことばもない。

（金子幸彦訳、一八二六年）

これはオデッサ時代の恋人の死の知らせに際してのプーシキンの心であるが、恋の加害者としての悔恨がこめられている。一八二六年はとくにデカブリストの首謀者の処刑と流刑、プーシキン自身の皇帝への赦免願の年である。恋人や同志への裏切りの後ろめたい感情、外的な迫害よりも自分自身の弱さ、罪、自分自身の中の地獄に詩人の心はさいなまれていく。

わたしは嫌悪のこころをもって
おのれの生涯を読みかえし
身をおののかせ　のろいの声をあげ
なげきつつ　にがいなみだを流す。
けれども悲しい記録のかずかずは
もはや消し去るよしもない。

（金子幸彦訳『思い出』一八二八年）

自己の悔恨、空ろなる心、苦悩する生命、そして生の目的の喪失感が詩人の誕生日の感慨となって記される。

ゆくりなき空しい贈り物　―いのちよ
おまえはなぜわたしのものなのか？
おまえはひそかなさだめによって
なぜに苦しみを言い渡されているのか？
虚無のなかから　にくしみの
こもる力でわたしを呼びおこし
わたしの心を悩みでみたし
思いを惑いで乱した者は誰か？
わたしのまえには何のあてどもない。
うつろなこころに　けだるい思い。

いのちのものういざわめきのなかに
わたしはひとり　うれいに疲れる。
（金子幸彦訳『一八二八年五月二六日』）

プーシキンが置かれた当時の苦しい状況、パリへの旅を監視役のベンケンドルフ第Ⅲ部長官に嘆願しても許可されない状況、デカブリストの思い出等々が、二九才の誕生日のこの詩の「空」の意識と「煩悩」の二重苦に影を落としていることだろう。そして常に迫り来る死の予感がプーシキンの無常感を深める。あたかも日々死と背中あわせで生きているかのようである。

さわがしい街をさまようときにも
人しげき寺院をおとずれるときにも
にぎやかな若人たちのまどいの席でも
わたしはひとりおのが思いにふける。
　わたしは語る　―年々は流れ去る
　ここにいるあまたの人もやがてみな
　ひややかな墓石の下に去るだろう
ある者にはそのときが近づいていると。
ひとりそびえる槲の木を仰ぎ見るとき
わたしは思う　―森の長老よ　おまえはそこに
わが父祖たちのむかしから立ちとおして
わたしの果てたのちまでも生きるだろう。
一八二九年一二月二三日
（金子幸彦訳）

自分自身の存在の危うさ、「空」をこのように深く意識しながらも、プーシキンのロシアへの愛はゆるがない。チャアダーエフがロシアの過去を「無」および「空」と表現したとき、プーシキンはそれに反論した。

「わが国の歴史の無（notre nullité historique）について、私はあなたの見解に断固としてくみすることができません。〈…〉
（胸に手をあてて）あなたは今日のロシアの状態に何か素晴らしきものを、将来の歴史家を感嘆させるような何かを見いださないでしょうか？　未来の史家が我々をヨーロッパの外に位置づけるとあなたはお思いですか？　わたし個人は皇帝にこころから愛着をいだいているのですが、じぶんのまわりに見るものすべてに歓喜し

ているというわけではまったくありません、文筆家としてわたしはいらだつことばかりです、偏見かも知れませんが、わたしは侮辱されています、―しかし、あなたに名誉にかけて断言しますが、わたしはどんなことがあっても祖国をとりかえたいとか、神がわれわれに授けた祖先の歴史以外の他の歴史をもちたいとは思わないでしょう。」

（チャアダーエフ宛書簡一八三六年十月十九日）

この手紙が書かれたのはプーシキンが決闘で命を落とすわずか数カ月前である。現実生活の様々な苦悩、膨大な借金、かけがえのない美しい領地ミハイロフスコエの売却の決意、妻の浮気の噂、などなどによって翻弄されている渦中の作家が旧友のロシア全否定論に対して、自分はこのロシアをどこの土地にもかえ難いと訴える。自分を苛む現実のロシアをプーシキンは愛してやまない、ロシアをかけがえのない自分の祖国だという。ロシアの社交界で侮辱され決闘を覚悟したプーシキンが祖国と祖国の歴史を称える。後世の史家のまえでチャアダーエフとプーシキンのいずれが歴史観において正しかったか、今でも判定は困難であろう。皮肉にもあの時代がプーシキンを生んだがゆえにわれわれは高く評価する。だが、彼は虚妄、虚飾のロシア社会の中、一切を空であると知りながら、なおかつ世間が彼と彼の妻を愚弄し嘲笑するのを黙視することができなかった。この世を「無」（ニシト）あるいは「空」（プストタ）として冷たく無視すれば悲劇は避けられたであろうに。

スヴャトゴルスキイ修道院に二つの質素な墓がある。三〇年間別居して死がやっと結び合わせた祖父オシップ・アブラモヴィチ・ガンニバルと祖母マリヤ・アレクセエヴナ・プーシキナの墓である。詩人はその祖父母の隣に葬られた。墓の後ろにはいまみごとな菩提樹の大木が生い茂っている。

（埼玉大学教授）